¡Hola, amigos!

第０７４号

（ＲとＮの Cádiz からの手紙）

皆さんこんにちは。これはＨＰというより、私達の近況をお知らせする手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は毎週、日本時間の金曜朝０３：００時から０７：００時の間に実施します。

臨時休刊の場合は、なるべくその前の週にお知らせしたいと思います。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のものは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。　　２００５年０８月１９日　カァディスにてＲ ｙ Ｎ

☆今週号のトップへジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは０７３号（０８月１２日）、０７２号（０８月０５日）０７１号（０７月２９日）の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。

＊今週号＊ No.074（2005年・第34週） ０８月１９日更新

「カモメの浜掃除」の巻

皆さんこんにちは。お盆休みの終わりに地震とは、とんだ締めくくりでしたね。スペインのテレビでも宮城沖地震は報道されました。

子供の頃は、ツクツクボウシやヒグラシの声が、早く宿題をやっつけないトー、とせっつくように聞こえたものです。あの、夏休みの友ってナンだったんでしょうか？

スペインに来て三回目の夏が過ぎようとしていますが、蝉の鳴くのを一度も聞いていません。誰かの随筆に、オリーブ畑で蝉時雨を聞いた、というクダリがありましたがホントかいなと思うほど私たちの生活範囲では蝉を見ません。

ベナルマデナでは近所の山にオリーブの木が植えられているところが結構ありましたが、やはり蝉が鳴くのを聞いた憶えがありません。

カァディスという町は自然の緑が皆無で、樹木と言えば街路樹と公園や広場に植えられたものしかありませんし、町の中に自然の川や池もありません。この半島そのものにそういう自然の風景はないんです。

だから蝉だけでなく蝶やトンボもきわめて少ない。ハイビスカスやブーゲンビリアの花に蝶がたわむれるという図は見たことがありません。トンボの飛んでいるのも、ごくたまにしか見かけません。

私たちは多分、平均的なスペインの人たちよりずっとそういうことに気をつけながら散歩していると思いますがほんとに虫や鳥の姿が少ないと思います。

日本では街中にもいやというほどいる、カラスさえもいません。どうしてでしょう？

辞書には cuervo＝カラスという単語は出ていますから、スペインでも多分もっと北の州にはいるんだろうと思います。

私たちの１０階の部屋には蚊も来ません。網戸もなしで窓は開けっ放し、蚊取り線香もナシでＯＫ。まあ、殆ど人工の半島では動植物が少なくても不思議はありません。

そのカァディスの浜の動物界で一番の縄張りを仕切っているのがカモメ組一家。カモメってヤツは、その姿かたちからはちょっと意外な気がするほど根性ワルの一面があるようです。一家という表現がぴったりするほど群れをなして、ほかの鳥を近づけないようです。ヒッチコックの「鳥」という映画憶えてますか？

あの怖い映画もカモメでしたね。カァディスの浜のカモメも人を恐れる気配は毛ほどもありません。人が近づけば一定の距離をおいて遠ざかりますが、別に人を恐れてではなく、それ以上近づくのはユルサンという感じ。広場に群れる鳩なんかも人を恐れる風ではありませんが、カモメは鳩よりもっとフテブテしいと言ったら言い過ぎか？

そのカモメが、例のＢＢＱの次の日から、こんな風に大挙して乾いた砂浜に降りています。普段は潮が引いた後、水の深さ１～２センチのところに降りているのが普通です。こんな風に乾いた砂浜に多数が集まっているのは殆ど見かけません。

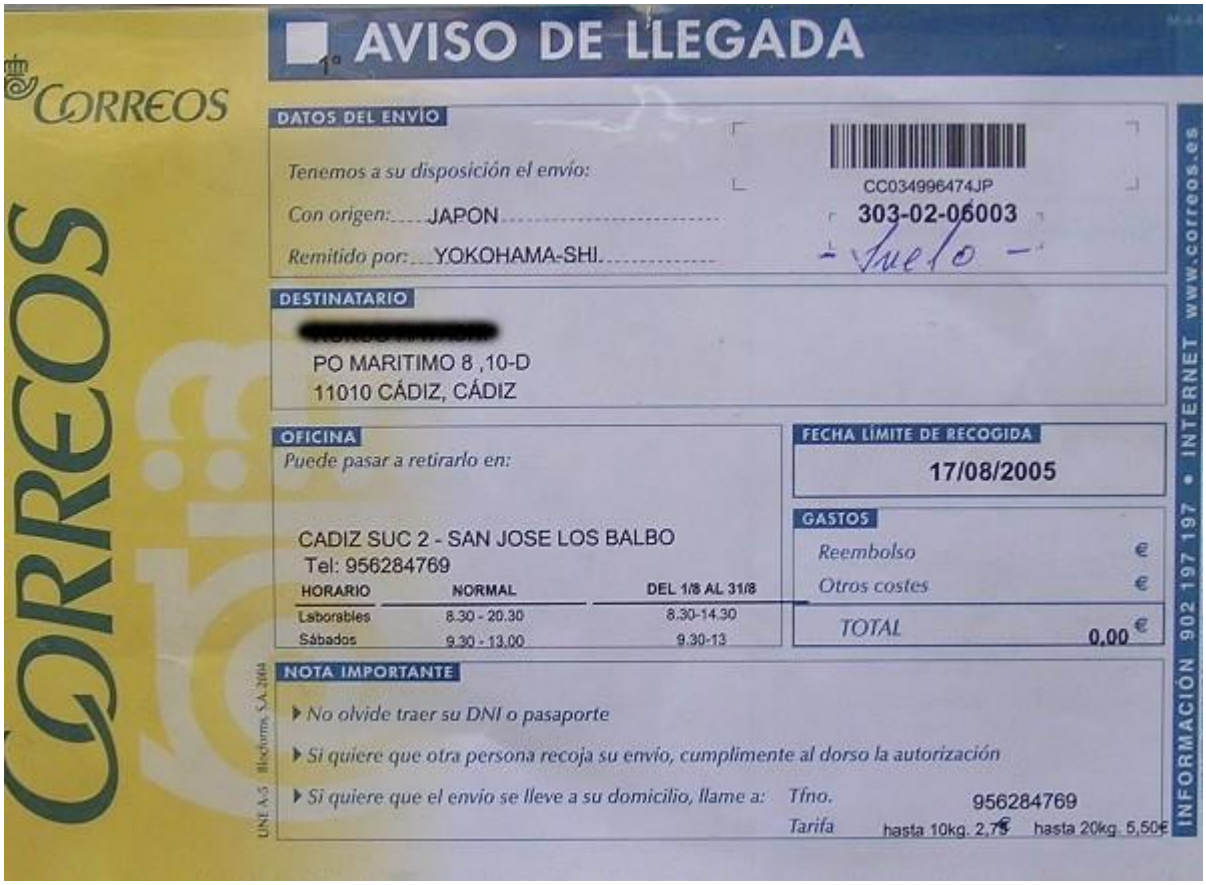
どうやら浜の掃除人が拾いきれなかった小さいゴミを漁っているんですね。

食べられそうなものはあんまりないと思うんだけど、毎年のことで彼らは食べこぼし

があることもよく分かっているのかもしれません。
掃除をしてくれるのは大いに結構、いっそのことガラスの破片やタバコのフィルターなんかも拾ってくれりゃいいのに。何しろ先週お見せした、あのゴミの状態ですから いくら掃除人が一生懸命拾い集めたってなかなか完璧というわけにはいきません。
街なかの庶民的なバルではペーパー・ナプキンはおろかエビの殻や爪楊枝など何でも床に投げ捨てが当たり前というお国柄です。
ウソかホントか知りませんが、バルでは、いかにもその店が繁盛しているように見せかけるため、わざわざゴミを少し床にばら撒くのだ、ナンテことがまことしやかに語られるほどバルの床は汚いです。
カマレロが仕事の手スキに床掃除をしているナンテところを見たことがありません。
店のほうも客のほうも床の汚れなんて気にしない。気楽がいい、のでしょう。
だから、２０万人か３０万人か知りませんが、そういう大群衆がＢＢＱをやった後とあっては並大抵のことではすみません。カモメにでも鳩にでも掃除の手伝いはおおいにやってもらいたいところ。

＊

日本から送った船便が、四個全て届きました。スバラシー！！
最初の一つがぴったり三ヶ月掛かったことはお話しましたね。後の三個の所要日数はそれぞれ８３日、９１日、８７日。最後の二つは同日着でした。
この二つ、横浜で郵便局から送った日付けは４日違い、たった４日しか違わないで同日着だったのは上出来と言うべきか、違う日に出したのにどうして同日着になってしまったのか、と疑問を持つべきか？　多分、横浜で同じ日に同じ船に積まれたのだ、ということにしておきましょう。とにかく、全部確実に着いたのは素晴らしい。
ベナルマデナの時のように、何個なくしたか判らずじまい、なんてのに比べれば無限大の素晴らしさ。「遅い」なんて文句を言うのはバチ当りというもんです。
郵便局のオバさんは四ヶ月は待てと言ってるのに三ヶ月で着いちゃったんですから。



CORREOS

1º AVISO DE LLEGADA

DATOS DEL ENVÍO

Tenemos a su disposición el envío:

Con origen: JAPON

Remitido por: YOKOHAMA-SHI

CC034996474JP

303-02-06003

- Suelo -

DESTINATARIO

[redacted]

PO MARITIMO 8 ,10-D

11010 CÁDIZ, CÁDIZ

OFICINA

Puede pasar a retirarlo en:

CADIZ SUC 2 - SAN JOSE LOS BALBO

Tel: 956284769

HORARIO	NORMAL	DEL 1/8 AL 31/8
Laborables	8.30 - 20.30	8.30-14.30
Sábados	9.30 - 13.00	9.30-13

FECHA LÍMITE DE RECOGIDA

17/08/2005

GASTOS

Reembolso €

Otros costes €

TOTAL 0,00 €

NOTA IMPORTANTE

- No olvide traer su DNI o pasaporte
- Si quiere que otra persona recoja su envío, cumplimente al dorso la autorización
- Si quiere que el envío se lleve a su domicilio, llame a: Tfno. 956284769

Tarifa hasta 10kg. 2,75€ hasta 20kg. 5,50€

INFORMACIÓN 902 197 197 • INTERNET www.correos.es

しかし、ここで疑問が一つ。この四個、一個たりとも配達された形跡がないんです。丁度そのとき私たちが不在だったことはあるでしょうが、門番アンドレスが全てのとき不在だったとは考えにくい。現に、このほかの小さい小包はアンドレスが代理サインをして受け取ってくれていたことも何度かあったのです。

この通知票、タイトルは「到着通知」です。「配達通知」や「不在通知」ではありません。では、ここではこういうものはハナッから配達する気はなくて、自分で取りに来い、ということでしょうか？　最下段には配達希望の場合は１０キロまで２．７５ユーロ２０キロまで５．５０ユーロとあります。配達に別料金がいるってヘンですよね。ベナルマデナではこういう通知票が郵便受けに入っていたこともあったし、現物を配達してくれたこともあったんです。だからこれは日本の不在票と同じ、と考えていたんですが、ここではどうもそうではなさそうな気もします。

ベナルマデナのときは郵便局ではなくて宅配便会社が配達してくれたことさえありましたが、どちらも配達してくれず通知票も入らない、要するに行方不明も多数。それに比べりゃ徒歩１５分のところへ取りに行くなんてお安いご用。

とにかく、また、袋を取り外して台車だけにした買い物カートを引いて取りに行きました。オバさんは私たちの荷物の重いことを覚えていて、またリブロ(本)なの？と今度はカウンター越しでなく横のドアーを開けて出してくれました。

帰ってくると丁度アンドレスが玄関の掃除をしていたので通知票の件を聞きました。彼の言うには、こういう大きい荷物は配達せず、通知票だけを郵便と一緒に持ってくる。しかし小さいものは現物を直接配達する、のだそうです。

この小さいものと言うのは、郵便配達用カートに収まる大きさ、またはバイクで持ってこれる大きさと考えていいようです。だから配達にトラックが必要なほどの大きさになると、通知票だけが配達される、というわけ。

そして、通知票の最下段に謳われているように、宅配を希望するなら別料金を払わなければならない、ということ。

でも、これってやっぱりヘンですよね。私たちが日本で払った送料は宛先まで配達することを前提にしているはず。「局留め」で送ったわけではありません。

スペインも早く郵政民営化しなくちゃイカンなー。＊＊＊

「サンセット・ディナー」の巻

４０数年前、Ｒがまだ駆け出しの頃、中南米西岸定期航路の船はホノルルに寄港していました。その頃の定期貨物船の航海士は「忙しい」を絵に描いたようなもので、特にペェペェの航海士はゆっくり上陸、なんてさせてもらえず、ほかのパートの人が上陸するのを横目でニランで我慢の連続でした。

それでもたまには忙中閑あり。ほんの１～２時間上陸を許されることもありました。港界隈をざっと一回りして、ジョッキ一杯引っ掛けるだけのあわただしい散歩でしたが、貴重な息抜きではありました。

その頃から港にはサンセット・ディナー・クルーズの看板が立っていたのを憶えています。沈む夕日を眺めながら夕食をするための、港外を一周する短いクルーズです。

へぇー、そんなことがウリになるんだナ、と不思議な気がしたのを憶えています。

自分達は毎日タダで、と言うか、否応もなくサンセット・クルーズをする毎日でしたし、その頃の若さでは沈む夕日をしみじみ眺めて感慨にふけるなんていう心の綾や襞を解さなかったからでもあるでしょう。１ドルが３６０円の頃でした。

その後、ホノルルへは日本人客が大勢押し寄せるようになり、このクルーズも日本人観光客で大盛況になったようです。

或る友人は、このクルーズに乗ったのはいいが、船上は日本人でいっぱい、おまけにスピーカーからは日本人客へのサービスのつもりか「スキヤキ・ソング」を大音量で流してくれるし、散々だったとコボしてました。

ナゼ夕日に「スキヤキ」なんでしょうね。元歌はとてもイイのに「スキヤキ」になってしまうとやたら陽気で、しっとりした夕日の雰囲気もぶち壊しです。

その点、我が家のサンセットは申し分ありませんヨ。夏の間は人のざわめきもちょっぴりありますが、それも潮騒に消されてそれほど耳障りでもありません。

春秋もですが、真冬、浜に人が一番少なくなる頃が私たちは一番気に入っています。

こんないい時間に入港するラッキーな船もあります。カァディスの夜はどんなかナ？

ドーダァ、という感じ、でしょ？

皆さんも是非見に来てください。ちょっと遠いのが難点ですけどネ。＊＊＊

「サン・セバスティアン城」の巻

前項の最初の写真、ワイン・グラスの上にチラッと見えている平ったい城、カァディス港へ入港する船の良きランドマーク。現在は軍事施設で入城はできないと思っていました。丸二年前、私たちが始めてこの町に来たとき、そう言われたのです。

ところが、先月娘が遊びに来たとき、彼女が聞き込んできた情報では夏場の週末だけ無料城内ツアーをやっていて、観光案内所で予約をすれば誰でも入れるとのこと。

彼女はすぐ予約に行ったんですが、もう一杯でだめだったと帰ってきました。結局、彼女は入るチャンスのないまま帰国してしまいました。

その後、海星仲間のカップルが我が家のお客様になったので前広に予約して一緒にゆくことにしました。カァディス市民でもチャンスはそうソウないのです。

画面下方の海に突き出たところが Castillo de San Sebastián カスティーヨ・デ・サン・セバスティアン。La Caleta と書いてある浜の上のハズレにある星型の城が前に紹介したカスティーヨ・デ・サンタ・カタリィナですね。この部分は旧市街の一番先っぽ、即ち半島の先端でもあります。

こんな風に航空写真で見ると、この付近は複雑な暗礁に囲まれているのがよく分かります。左下隅に白く波が砕けているところがありますが、これはウチのベランダからもよく見えます。干潮時にはこの浅瀬の先端まですっかり干上がってしまいます。
旧市街の海岸から城までは乗用車がやっとすれ違える位の幅の通路でつながっています。建設しやすい岩場の上を選んだからでしょうか、くねくねと折れ曲がった海上通路で、冬のしけ気味の日には波が打ちあがります。
この両側の岩場にはきっと蛸が棲みついているに違いないと、目星をつけているんです。そのうち何とかしたいモンだと、また食い意地がちらり。

ベタ凪の日の干潮時、ウチのベランダから見たカスティーヨ。満潮時には岩は城壁の近くまで殆ど海面下に没します。前の航空写真が満潮時近くの様子です。

灯台がはっきり見えますね。左端の黒点二つは大砲。今手元には英文の簡単な案内書しかないので詳しいことは分かりませんが、ここに灯台がはじめておかれたのは多分紀元前のことだったのでしょう。旧市街の南のハズレにあるテアトロ・ロマーノ（ローマ劇場）という階段教室風の石造りの劇場は紀元前１世紀に建造されたものだそうですから、初代の灯台は勿論それより前のものと考えられます。ひょっとしたらローマ人以前のフェニキア人の時代かも知れません。

城の名前の由来は、１５世紀の頃、ペストに罹ったベネチアの船の乗組員を収容した礼拝堂なのだそうです。現在の城の外郭は１８世紀のものらしい。

参考のため読んだ英語の案内書はスペイン語のものを翻訳したものらしいですが、明らかに誤訳と考えられる部分が多くて何がナンだかさっぱり分かりません。英語の案内パンフレットなどはこういうことがママあるんです。

カァディス港へ入港する船はこの城の向こう側を回りこんで画面の右に進みます。

海上通路への入り口。caleta とは入り江ですが、この場合は右手の浜の固有名詞。

サン・セバスティアン城全景。くの字に曲がる海上通路を通って近づいてゆきます。

海上通路の終点。普段はこの通り城門は閉ざされていてこれから中には入れません。その辺にぱらぱらと集まってきているのは今日のツアーの予約客ですが、定刻になっても城門は開きません。やっぱりネ。

１５分ぐらい経過してそろそろみんながそわそわし始めた頃やっと開門です。ツアー客は私たち４人以外は全部スペインの人達。そりゃ、まぁソウでしょうね。こんなマイナーなとこへ来る外国人観光客は多分いないでしょう。この催しは観光客目当てではなくて、市民にここの歴史を知ってもらう為に市当局が企画したのではないか、ツアーの後で市のアンケート用紙に記入を求められたことでもそれがうかがえます。この日のツアーはこの城の歴史ツアーとでも言ったらいいでしょうか。全てスペイン語の説明なので私たちはさっぱり内容がわかりませんでしたが、案内役のリーダーをはじめ数人のアシスタントがそれぞれ色々な扮装を凝らしてその役になりきっているのが面白かった。歴史劇をやりながら、説明をしながら城内を案内して回るのです。リーダーやアシスタントたちはカァディス市役所の職員ではないかと思いました。市役所職員の演劇同好会という感じの素人っぽい好感の持てる人たちでした。

修道士の扮装のリーダー。ツアー客にも色々小道具を渡して雰囲気を盛り上げる。

何の意味があったのかイギリス海賊に扮したアシスタントの一人。なかなかの役者。

古い(多分ローマ時代の初代か二代目の)灯台跡。その当時は更にこの上に別の構造物があったのでしょう。右端の二人の女性も案内役。

城内は軍事施設らしい様子は全く見られず、写真撮影も自由。かなり荒れ果てた感じでした。普段、人を入れないのは軍事施設だから、ではなく、広くて管理が大変なのとこれ以上荒れさせたくないから、みたいでした。バカ者はすぐ落書きするしネ。

軍が管理している唯一の証拠みたいなのが、我が家からも見えるこの大砲。今はコレも巨大なクズ鉄でしかありません。殆ど全体が廃墟の中で灯台だけが現役です。

監獄の跡。目の前を幽霊が？と思いきや、カメラの前を横切ったリーダーでした。牢獄という陰鬱な感じはなく、明り取りの窓からは海の絶景が見え、そのまま高級ホテルに改装できる絶好のロケーション。こんな所へ投獄されたらまさに別荘暮らし。

ツアーを終えて案内役のお別れの挨拶の後みんなで記念撮影。彼ら自身がシンから楽しんでいたらしいのが好感を持てた一番の理由。リーダーの修道士役は後で私達の所へ来て(話は)分かりましたか？と聞いてくれました。ヘンナのが混じってるなと気にしてくれてたんですね。話は分からなかったけれど大いに楽しみました、と答えるととても嬉しそうでした。パブリック・サーバントは須く斯くありたいものですね。

お別れのダンス。海賊に Shall we dance? と誘われてフォーク・ダンス（らしきもの）を踊る？N。丁度、電池を入れ替えていたのでベスト・ショットを逃しました。

いつもの視角の逆方向、カスティーヨから見たプラヤ・ビクトリアの我が家。

再び、いつも見慣れた視角でのカスティーヨ。単純かつ見飽きることのない風景。

皆さんも是非見に来てください、私たちがクタバラないうちに・・・。＊＊＊